



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	一般交換の新たな成立メカニズム：所属集団に関する情報の利用〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	小野田，竜一
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12343号
Issue Date	2016-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62475
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Ryoichi_Onoda_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 小野田 竜一

主査 准教授 高橋 伸幸
審査委員 副査 教授 結城 雅樹
副査 准教授 今井 順

学位論文題名

一般交換の新たな成立メカニズム：所属集団に関する情報の利用

審査委員会は平成 27 年 12 月に第 1 回のミーティングを行った。そこでは論文の配布、申請者の履歴と関連業績の紹介を行った。第 2 回のミーティングは平成 28 年 1 月に行い、論文の内容の確認と討議を行った。その結果、本論文は 24 万字（400 字詰め原稿用紙で 600 枚）を超える大部なものであり、コンピュータ上でのシミュレーションと数理解析という社会心理学では新しい研究方法を用いているため、先行研究と本論文との関係や、他分野の研究に対するインプリケーションについては、より綿密な検討が必要であると判断した。そのため、審査期間を 3 ヶ月延長し、慎重に審査を行った。そして、平成 28 年 5 月に口頭試問（発表 40 分、質疑応答 40 分）を公開で行った。その直後の第 4 回のミーティングにおいて、総合的評価を行い、学位授与にふさわしいとの結論に達した。その後、審査報告書の作成及び確定を行った。以下では、本論文が学位授与にふさわしいとの結論に達した根拠を述べる。

本論文は、社会科学及び生物学における最重要問題の 1 つである利他行動、その中でも特に、多人数間での一方的な利他行動の成立基盤を探るものである。これは、人間社会に特有の現象である一般交換を構成する必要不可欠な要素であるにもかかわらず、未だ十分な説明がなされていない。一般交換についての研究は、1990 年代以降、社会科学者に加えて数理生物学者や数理人類学者を巻き込みつつ、急速に進展してきた。本論文は、このように学際的な領域で注目を集めている一般交換成立メカニズムについて、新たな回答を提出しようとするものである。本論文は、この目的のために、適応論的アプローチを採用する。このアプローチでは、人間がある行動傾向を身につけているのは、それが副産物として本人の意図しないかたちで利益をもたらすからである、と説明する。ただし、副産物として自己利益がもたらされる仕組みは非常に複雑であるため、本論文では人々の間で起こる相互作用のパターンを重要な変数とし、数理生物学で用いられるスタンダードな手法である進化ゲーム理論に基づくシミュレーションと数理解析を用いてその結果を考察するという手法を採用した。本論文はこのように、社会心理学という領域の枠を大きく超えた学際的研究となっており、この点は高く評価できる。

本論文で得られた知見は大きく分けて二つある。まず、集団が複数存在する場合には、内集団ひいきというかたちで一般交換の範囲が集団内に限定されること、しかし均衡となるのはそれだけではなく、普遍主義もまた均衡を形成すること、である。これらの知見のうち、特に前者は利他行動が適応的となる新たな仕組みを提唱するという大きな意義がある。また、内集団ひいきという行動が均衡となるためには、集団内の人々が血縁関係にあること、集団内の人々の行動については知っているが集団外の人々の行動については知らないという情報格差、あるいは集団内の人々は個体認識できるが集団外の人々にはできない、といった実体としての意味が集団に付随している必要はないことも明らかにされた。これは、先行研究で前提とされてきた集団の持つ意味について、再考の必要性を示すものである。よって、これらの知見は今後の利他行動研究の発展を促すことになるだろう。本論文から得られた成果は既に日本語で 2 編の審査付き学術誌論文として発表されている。この点からも、学術的な貢献は十分にあると言える。

審査委員会では、一部に概念的な検討を更に要する部分もあることや、序論の論旨の展開や結果

のインプリケーションについて更に精緻な議論が必要であることが指摘されたが、それらは本論文の成果の価値を減じるものではない。本論文は、人文学から社会科学、さらには生物学にまたがる学際的な領域における利他行動という問題に果敢に挑戦し、理論的に新たな回答を提出している。このような試みの新規性と独自性は高く評価できる。よって、当審査委員会は全員一致で博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。